

音楽的分析を核とした民謡のトピック抽出

—福井県民謡の発展的創造を見据えて—

河 野 久 寿

(2020年3月2日受理)

Topic extraction of folk songs based on musical analysis

—For the progressive creation of Fukui folk songs—

Hisatoshi KAWANO

要旨：近年郷土に伝承されている民謡が、次第に衰微または消滅しつつあり、特に若者の民謡離れが深刻な状況の中、次世代へ広く伝承するためには時代に即した形での変容が必要である。本研究では、将来的な発展的創造を見据え、1986年の調査データのアーカイブ化を行ったのち、そのデータの中から2曲を選び、曲の特徴を明らかにしつつ音楽的分析からの採譜を行った。

Key words：音楽的分析 (Musical analysis) 福井県民謡 (Fukui folk songs)

1. はじめに

近年郷土に伝承されている民謡が、次第に衰微または消滅しつつある。特に若者の民謡離れが深刻である。福井県民謡においては、調査記録、録音保存、数少ない旋律採譜に留まっている。次世代へ広く伝承するためには、民謡自体が時代に即した形での変容する必要があり、歌唱実践を目的とした再創造を施す必要がある。

・日本における民謡の現状

わが国には古くから数多くの民謡が伝承されている。それらの民謡は、それぞれの地域の歴史と風土に根ざし、人々の生活や心情の姿を伝える大切な民俗文化財、後世に残すべき“レガシー”である。ところが近年、生活様式や文化の急激な変化、伝承者の高齢化にともない、郷土に伝承されている民謡が次第に衰微または消滅しつつある。特に若者の民謡離れが深刻である。世論調査の結果からも、若者の伝統芸能への関心の低さが伺える。

・若者の民謡離れの要因

若年者の民謡離れには様々な要因が考えられるが(表1)¹⁾、子ども達が学校教育や生活環境の中で民謡と接する場面が少ないという外的要因は民謡離れに大きな影響を及ぼしているだろう。また、「実際の中学校の授業でも、秋田民謡のビデオを視聴させたところ、生徒は拒絶反応を示し、民謡を歌うのを嫌がった。(桂、2000)」²⁾とあるように、既に民謡が身近な歌でなくなった現代においては、単純に民謡との接点を増やすことは必ずしも民謡離れの解消に結び付かない。

表1 若年者の伝統芸能への関心の低さに及ぼす要因 (小坂、1997)

外的要因	内的要因
①生活の唄ではなくなり <u>気軽に口ずさまれなくなった</u>	①民謡会や民謡教室などの参加者は年配者が多く、 <u>若年者が参加しにくい環境</u>
②娯楽の多様化	②民謡の伝承方法が楽譜に頼らない口頭伝授のため、五線譜で音楽教育を受けていた若年者に受け入れられ難い
③若者の音楽の好みの変化	③民謡の伴奏には <u>和楽器のみ</u> 使用され、洋楽器は使用されない
④小中学校音楽教育で <u>疎んじられている</u>	

・民謡離れ解消の方策とその社会的意義

子供・若者への伝承は、その“謡（うた）”の歌詞の内容、背景、郷土性、心情等を理解した上で、実際に親しみを持って“歌唱する”ことが重要である。しかし、授業などで扱う困難も指摘されている。現代の子供・若者にとって民謡は必ずしも身近なものではないことから、広く子供・若者へ伝承するためには、民謡自体が時代に即した形で変容する必要がある。そもそも、民謡は伝承されるにつれ、社会的環境や時代背景によって、音楽上も歌詞の上でも変化するものである。子供・若者の歌唱実践を目的とした再創造を施し、更にその伝承実践の場においては、音楽面は勿論、民俗学的背景の理解を深める方法の研究も必要である。民謡の伝承は、郷土を知り、郷土を愛し、地域に根付いた人材育成にも繋がり、地方創生、地域活性化の一助にもなると考える。

・福井県における民謡調査

（表2）が本県民謡文献の主なものである。

1966年福井県教育委員会による調査が行われ、文書による調査から『福井県の民謡』が、録音テープによる収録から『ふるさと福井の民謡』（財）福井県文化振興事業団（CD全35枚）が残されている。その後、県教育委員会による第2回目の調査が1986年に行われ、文書による調査から『福井県の民謡—民謡緊急調査報告書—』、また録音記録については、カセットテープおよびMDにコピーされたものが福井県立歴史博物館に1セット存在し、34箇所千曲を超える曲がこれまで未編集であった。本研究について録音記録から分析する以上、編集・アーカイブ化が必要である。

録音は記録として残されているが、伝承者の高齢化による歌の技術的な問題から、音程が不安定であったり、リズムや間が曖昧であったりと、その録音を手本として伝承に繋げるには難しい状態である。採譜に関して、『ふるさとのおき 北陸の民謡 改訂・増補版』が曲数も多く採譜されているが、節回しを忠実に採譜しようとしたあまりに音数やリズムが細かく、無拍子であったり、

歌詞が読み辛く、一番のみであったりと専門家以外では譜面からの再現が難しい状態であり、音楽的分析から採譜を行う必要がある。

表2 福井県民謡調査文献一覧

書 名	発行者	発行年
福井県の民謡	民俗学会	1967
若越民謡大鑑	杉本伊佐美	1973
福井県の民謡 —民謡緊急調査報告書—	福井県教育委員会	1988
ふるさとのいぶき 北陸の民謡 改訂・増補版	加賀民謡会	1988
若狭美浜のわらべうた歳時記	田辺修一郎	2009

・福井県民謡の音楽的側面からの研究

民謡の研究は、その歴史的側面からの調査は重要とされるが、民謡が本来“謡（うた）”であり、“歌う”という表現活動により、より多くの人々の中に歌われ、歌い継がれて初めて民謡として生きるものということ、再創造へ繋げることから考えると、歴史的側面からの調査は間接的であると言え、直接的な音楽的側面からの分析は必要不可欠である。

しかし、福井県の場合、歴史的・民俗学的側面での調査・研究は相当な成果も見られるが、音楽的側面からの研究は数少ない。（福井県民謡の旋律構造(1)(2)(望月、1977、1979)など）

民謡はそもそも口伝による伝承方法が主であるが、広く歌唱実践するためには、現代において楽譜にする事が必要である。

その意味において、民謡の専門家と音楽理論に精通した音楽家との共同作業が必要であろう。

2. 本研究の背景

民謡に関連する活動として、筆者は2015年より民謡ユニット『遊法師』にて、全国各地の民謡に独自の現代的アレンジを施し、再創造した楽曲としての良さを追求しながら、民謡の魅力を伝える音楽活動を行なっている。2016年には福井由来の楽曲（漆かき唄、ペチカなど）をアレンジし、キングレコードよりCDをリリースした。また、個人でも作曲編曲活動の中で全国各地の民謡の編曲を手掛け（長崎ケーブルメディア番組「長崎の唄 長崎の音」での

木管アンサンブル編曲など)、その過程での分析の中で、民謡に音楽素材として魅力を感じるとともに、地域の歴史と風土に根ざした、日本固有の後世に残すべき“レガシー”であるとの思いを懐くに至った。また、上記演奏活動や編曲楽曲コンサートの場において、観客の年齢層が高く、若年層の少なさが民謡を後世へ残す事への危機感を感じるものである。

近年福井県民謡を題材とした研究や発展的創造物も見られず、伝承者も数少ない中、このままでは消滅を待つのみであり、次世代への伝承実践の取り組みは必須である。

ただ、民謡は昨今の音楽トレンドとの比較では、特徴が分かりにくくその存在価値も薄れてきているのが現状である。

3. 研究目的

本研究では、福井県民謡調査データを基に楽曲を掘り起こし、音楽的分析を中心に、歴史的・民俗学的・歌詞など多角的な観点から、最終的にその特徴を纏める。本県民謡については、これまでに調査記録は数多く残っており、多角的な分析によりトピックを抽出することで、楽曲の存在価値を明確化する。

昨今課題とされる地方創生、地域活性化の観点からも、郷土由来の創造物である民謡を次世代への伝承は、深く郷土を知り、郷土を愛し、外へ発信できる人材育成にも繋がり有益なものと考ええる。

本県教育委員会による第2回目の調査は1986年に行われ、概要をまとめた調査報告書『福井県の民謡―民謡緊急調査報告書―』が纏められているが、調査当時の詳細記録は調査書原本に記録されており、その原本は保存状態も悪いためPDFデータ化・整理を行う。録音記録については、カセットテープおよびMDにコピーされたものが福井県立歴史博物館に1セットのみ存在し、34箇所千曲を超える曲が手付かずのままであり、その音声データの波形編集・アーカイブ化を行う。

録音データから音楽的分析を行い、調査書等を参考にしながら、最終的に多角的な観点でその特徴を明らかにし、歌唱実践に適した形での楽譜制作を行う。

4. 研究成果

アーカイブ化したデータの中から、過去に楽譜化されていない2曲（竹田ヤレヤレ、やっさか踊り）を取り上げ、音楽的分析から採譜、および歌詞の編纂を行った。採譜に関して留意した点として、変拍子など難しい拍子にならない。（裏返りのない2拍子、節回しはごく簡単な形に、の2点である。（協力：恩地見佳）

～竹田ヤレヤレ～

福井県坂井市竹田地区（旧丸岡町竹田地区）に伝わる民謡。竹田地区は、養老元年（西暦717年）泰澄大師（白山信仰の開祖）が豊原、吉谷と次々と足跡を残し、以来、行者の宿として竹田が拓られたといわれている。

その竹田地区で歌い踊られている盆踊り唄。「じょんころ」「やれやれ」の二種類があり、二つあわせて竹田音頭と言われている。山間の集落として独特の踊りが発展した。里の方とは孤立した所に住む者の唯一の娯楽であり、盆踊りは若い男女の交際の場でもあった。かつては、お寺の報恩講とお盆の三ヶ日は桐の下駄がすり減ってしまうほどに踊り明かし、特にお盆には、まず十四日に上竹田から始まり、山口、下竹田、曾谷と場所を変えて三日間踊り続けた。四地区輪番に踊りの輪が立ち、若者を先頭に娘や子供の踊り子が整然と隊列をつくり、提灯をかざした輪の中に礼儀正しくあいさつを交わし入って行くしきたりがあった。

現在は、8月15日の一晩のみ三地区の輪番で踊られている。

メインの踊り唄は「じょんころ」であるが、踊り子が揃ったところをみて「口説き」と言われる「やれやれ」が始められる。口説きには様々な種類があり、鈴木主水、天一坊、岩見重太郎などの歌物語を音頭に乘せて歌っていく。その中の数え歌である。口説きが始まる際には、口上のような歌詞から始まる。次いで、一から十までの韻に合わせた歌詞が歌われる。題名は歌いだしの「ヤレヤレ ヤレドウ ジャイノ…」から採られた。民謡のタイトルにはこのような例が多い。

竹田ヤレヤレ 歌詞

(ヤレヤレ ヤレドウジャイノ ヤサドッコイドッコイシヨ)
 ヤレー
 わたしや ちよいと出てべんこなけれど
 ひとつやりましよう はばかりながら
 先な先生は在所か他所か(ヨイトコ ヨイトコ)
 ヤレー
 他所か他所かうらやま町か
 どこのどなたかわしや知らねども
 声もよく立つ 文句もわかる(ヨイトコ ヨイトコ)
 ヤレー
 わたしや先生のように 読めないけれど
 ひとつよみましよう おおそれながら
 一つ 日の本 大日如来 ヤレー
 二では 新潟の 白山様よ 三では 讃岐の 金毘羅様か
 四では 信濃の 善光寺如来 ヤレー 五では ご開帳の 権現様よ
 六で 六角堂の 六地藏様か 七つ 七尾の 天神様よ ヤレー
 八つ 八幡の八幡様よ 九つ 高野の 弘法大師
 十で ところの 氏神様よ
 ヤレー
 あまり長いのは先生にご無礼
 ご無礼失礼いたさぬうちに
 さきの先生にお渡ししましよ

～歌詞の概略～

私はけっして口のきき方が上手ではありません。また、先に歌われた方はこの在所の方か、どこか他からおいでの方かは存じませんし、その方にははばかりれますが、せっかくなので一つやらせていただきます。

先に歌われた方は、どこのどなたか、裏山町から来られたのか存じませんが、声もいいし、歌の文句も上手ですね。

私なんぞは先の方のようににはできませんし、恐縮ですが、さっそく一つ歌わせていただきます。

一つといえば、日本の大日如来様

二といえば、新潟の白山様

三は讃岐の金毘羅様

四は信濃の善光寺の如来様

五は御開帳の権現様

六は六角堂の六地藏様

七つは長柄の天神様

八つは八幡の八幡様

九つは高野山の弘法大師

十はところの氏神様でしょう

こうして一から十まで詠んでみましたが、あまりに長くなると先の方に無礼ですので、失礼が

ないうちに、先ほどの方に音頭とりをお渡ししたいと思います

竹田ヤレヤレ

♪ = 85

ヤ レ -

ヤ レ ヤ レドウジャ イノ ヤ サ ドッコイドッコイシヨ

- ヤ レ - わ た しや - - ヤ - - レ ち ょ い と

で て べ ん こ な け れ ど ひ と つ や り ま し ょ

は ば か り な が ら さ き な せ ん せ い は ざ い し ょ か

た し ょ か ヨイトコ ヨイトコ

～やっさか踊り～

福井県越廼あたりの民謡。同様の歌が越前海岸を北に、福井市大丹生、小丹生、長橋など海沿いに多くの地区で歌われていた。また、同じ海沿いの三国町にもみられる。越廼の蒲生菜崎で十月十三日から

やっさか踊り 歌詞

やっさか踊りを 習うたかござれ
 (ハ ドッコイサツサ コラサツサ)
 金の四、五両も ノー 持ってござれ
 (ハ ヤツサカ ヤツサカ)
 金の四、五両も 持って来いと言ったら
 紙を包んで ノー 持ってきた
 恋し恋しと 鳴く蟬よりも
 鳴かぬ蜩が ノー 身を焦がす
 夜明けガラスとにわとり憎や
 かわい殿さんの ノー 目を覚ます
 蒲生や柴崎 町かと思うた
 広い町じゃに ノー 茶屋がない
 唄は声より こなしが大事
 娘器量より ノー 気が大事
 姉と妹に むらさき着せて
 どれが姉やら ノー 妹やら
 わしとあなたは 羽織のひもよ
 固く結んで ノー 胸に抱く

十五日の祭りに神社境内にて踊られたが、のちにお盆にも踊られるようになった。海沿いの多くの集落に伝わるが、踊り方も歌い方もそれぞれ少しずつ違いがある。囃子言葉の「やっさかやっさか」が題名となっているが、歌の系統としては越前一带にみられる「やんしき」「やっしき」「でんすけ」系統の口説き唄と推察される。いずれも音頭ものといわれる「江州音頭」の流れであろう。

鳴き声がない光っている蜩のように私は恋焦がれております

蒲生や柴崎は私が住んでいるところより町ですね
町かと思うほどに広いわりには茶屋はないですね

5. 今後の展開について

本研究により、1986年の調査データ（調査書・音源）をアーカイブ化し整理することができた。新たな福井県民謡の発掘は伝承者の高齢化や他界によって難しい中、1966年調査の音声データ（CD『福井県の民謡』）と合わせ、この2つの調査データが福井県民謡の全てと言って良いだろう。今後は、伝承者の説明等を記録した調査書を含め、これらのデータから、音楽的な分析による採譜またはその曲が持つ歴史や背景などを、多角的な観点から特徴を明らかにし、福井県各地の代表的な曲を纏める。

その中で、更に子どもの歌唱に相応しいものを選び、簡単な伴奏を付け、歌の背景・歴史的な特徴などを纏め、次世代へ繋ぐべく教育の現場での伝承活動を行っていきたい。子どもが歌いやすい現代的な形への変容は、特殊な技術が必要であり、音楽家の役目であると考えている。

民謡の伝承は、郷土を知り、郷土を愛す、地域に根付いた人材育成にも繋がるものであり、地方創生・地域活性化の一助になるよう力を注いで行く。

やっさか踊り

やっさ か

おどりを なら た か ー ざ れ ハ ドッコイサツサ

コラサツサ かねの しーご りょうもー ノーもってー

ごー ざ れ ハ ヤツ サ カ ヤツ サ カ

～歌詞の概略～

やっさか踊りを習いたいなら来なさい
習うなら金の四、五両も持ってきたさい

習うなら金の四、五両も持ってこいと言ったら
紙に包んでもってきた

恋しい恋しいと まるであの木で泣いているセミのように騒ぐより

引用文献

- 1) 「ふるさとのいぶき 北陸の民謡 改訂・増補版 付録〔歌詞編〕」加賀民謡会, 1997
- 2) 桂 博幸「日本民謡の指導法について―非常勤講師による指導を組み入れた授業実践例を中心に―」秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要(22), 2000

参考文献

1. 「福井県の民謡」, 民俗学会, 1967
2. 「若越民謡大鑑」, 杉本伊佐美, 1973
3. 「福井県の民謡―民謡緊急調査報告書―」, 福井県教育委員会, 1988
4. 「ふるさとのいぶき 北陸の民謡 改訂・増補版」, 加賀民謡会, 1988
5. 「若狭美浜のわらべうた歳時記」, 田辺修一郎, 2009
6. 望月敬明「福井県民謡の旋律構造-1-三国節・越前紙すき唄」福井大学教育学部紀要 第6部 芸術・体育学(11), 1-21, 1977

研究協力者

福井県立歴史博物館学芸員 川波 久志、民謡歌手 恩地 見佳

アーカイブ化協力

下道 聡(Mind and Soundlife, Inc.)

本研究は、仁愛女子短期大学共同研究助成により行われた。